

留学生の支援策を開発するためのワークショップ

——「九〇后」世代の「生きづらさ」に着目して——

都市文化研究所 研究員 張心怡

背景と目的

グローバル化によって留学生が年々増えている日本。それらの留学生はほとんど十代二十代の若者たちだ。彼らは、感情的な孤独、卒業論文、就職活動、経済的なストレスといった留学生として避けて通れない共通の難関がある。特に、留学生の中に四割を占めている中国人の留学生は、中国国内で「九〇后」と呼ばれている90年代生まれの世代である。この世代の留学生は、一人っ子的場合が多く、家族に囲まれて大事に育てられ、繊細で自尊心が高い一方、厳しい受験教育の中に、受け身の立場で知識を吸収する習慣が醸成されたため、学問に取り組む積極性が欠けるといった気質を有するとされる。それ故、単身留学してきた彼らは、孤立化や学業に対する無気力に陥りやすいと考えられる。そうした困難を自力で乗り越えていくことも、人格を向上させる上で誰でも経験すべき人生の一環であるとも言えるが、留学生の悩みの背景と原因を探り、例えば「九〇后」の持つ世代的な気質といった社会背景を考慮しながら、問題に応じる有効な支援策を時代と共に更新すべきだと考える。

そこで、本報告は、「九〇后」留学生の「生きづらさ」に焦点化することで、①これまで不可視化されてきた彼らの悩みを「見える化」し、②そうした「生きづらさ」に起因する悩みや困難を他の留学生や日本人と共有できる「場」を構築することを目指す。その延長線上に、彼らを精神面で支えるためのスキーム作りや、あるいは多くの留学生が躓く、レポート、卒論・修論指導の改善策の検討を位置づける。

方法

本報告は、以上の支援策を開発する最初の段階としての調査である。留学生たちの具体的な悩みをグループワークによって明らかにし、それに対する解決方法の提案を筆者が考えた後、また留学生に還元して有効かどうか討論してもらって、支援策のベースを作っていくことを目指す。そのため、悩みを言えるようになる打ち解けた雰囲気醸成することが重要である。

具体的な実施について、大阪の留学生を都市文化研究所の事務所へ誘い、ワークショップを二回企画する。まず、芸術ワークショップや、六甲山の付近の散策や、食事などでアイスブレイクを行う。その後、問題解決のためのグループワークに入る。一回目のワークショップの目標は、話し合いとアンケートを通して留学生はどんなことに悩んでいるのか、その問題点をKJ法を用いて明らかにし、望ましい解決策を考えてもらうことである。一回目のワークショップが終わった後、留学生自分が欲している解決策を元に、筆者は具体的な解決案を作る。二回目のワークショップの目標は、具体化された解決案を再度留学生たちに提案し、その有効性や新たな解決等についてディスカッションしてもらう。そういうステップ・バイ・ステップの中に、「90后」世代の留学生の悩みを解決するためのスキームが浮かび上がると考えている。